

「地域の變貌」の刊行にあたって

「世界のどこにも地理的調査が完成されたと思われる地域はない」とは、ドイツの地理学者ペンクがのべた意味深い言葉である。それからすでに数十年の歲月はすぎているが、この指摘は今日でもなお新しく私たちにひびいてくる。それほど世界のどの部分をとりあげてみても、絶えず地域は新しく変りつつある。とくに今日において、地域の變貌はいちじろしい現象である。

このときに、日本歴史地理学研究会は、紀要第二集に「地域の變貌」を中心テーマとして編集し、このテーマをとりあつかった論文十數篇を掲載することができた。その論ずるところは、日本各地にわたり、その時代は先史・古代・中世・近世・近代の多方面にわたっている。いずれもその方面の代表的な力作といえよう。これらの論文は多方面から「地域の變貌」について論及し、それぞれに特色があふれている。その特色は地域や時代によって制約される資料から生じたものか、研究する地域においてとくに関心をひく地理的事象のちがいによるものか、また歴史地理学的メトードの相違にもとづくものか、会員諸兄の御判断に待つことにしたい。

しかし、そうでありながら、なおも全体の底流として紀要を通して貫らぬいている一つの共通性に注目せざるをえない。それは歴史的現在といわれる時の流れに対する断面における地理的事象の復原やより古い過去の断面との比較、そしてその間における地理的事象の継起的变化の追求について、すべての人々が方法や重点のおきかたがちがっていても——主要問題としてとりあげることである。このような諸観点はドイツのウイヘルム・ゲッツが五十年

前に発言してから歴史地理学の基本的方向をなしているものであり、「地域の変貌」のとりあつかい方としての諸原理であろう。今日の歴史地理学はこの基本的方向をたどりながら、ゲッツによって満たされていなかった課題を一層に深化し、拡大することができている。紀要第二集によせられた会員諸兄の論文はこの進歩を十二分に説明している。

歴史の現在という名句はイギリスの歴史地理学者ハーフォード・マッキンダーの言葉であるが、この歴史の現在における断面に復原すべきものは、過去の地理的事象からいかなるものをいかなる基準をもって選択すべきかという問題も、この紀要の諸論文のどれも解答している。現在から過去をふりかえり、今日の地域を形成しているかぎりの過去に成立した地理的事象を求めるといふ立場、過去の断面の復原を今日に基点をおく方法は、復原するときにつき当る多くの難問を解消しようとする一つの実際的方法であろう。この立場にあれば、その地域においてもっとも古い時代からつねに研究をはじめなければならないというような規定も成立しない。ある地域においては先史時代にもさかのぼる必要があり、他の地域では問題によつては近世からでも充分であるともいえる。

歴史地理学が単なる歴史の現在における断面の復原にとどまるならば、歴史主義に立ちながら、却つて非歴史的な結果になることを注意したのは野間三郎氏であるが、この問題を克服することも重要問題であろう。同時に地域を歴史地理学的にとらえることと、一種の史学と見なすべき地域史に陥ち入ることをも警戒しなければなるまい。もし二つ以上の時の流れに対する断面を復原して、その変化を追求すれば——この方法は比較歴史地理学となつて史学に接近していくが——そこには姿が異なる地域が層位的に発見することができる。例えば関東地方の地域は、今日にあっては先進的な西関東に対して後進的な東関東を対比することができるが、近世にさかのつぼて断面を設定すれば、むしろ北関東と南関東の差異が強く現われていることを否定できない。ここに近世から近代にかけて、関東地方におけ

る「地域の変貌」が問題として浮びあがってくる。このような場合、紀要に論文をよせられた会員諸兄は研究の重点のおきかたがすべての人々に必ずしも一致していない。これは歴史地理学の内部が多方面に発展している姿を如実に示しているわけである。ある人々は地理的事象が変化し、形成されて、しだいに一つの完成された地域が成立する過程を説明され、また他の人々は古くから成立している地域が変貌していく姿をとらえようとしている。あるいはまた段階的に断面を明かにして景観の変遷を追求することを強調する人々もある。

「地域の変貌」を考えるに当って、地域を変貌させる力は外部から与えられるか、内部に発生するかは、人々によって見解が分れる点であるが、その力は時代によって異なるか、地域によってちがうか、この問題についても、ここに発展された論文は、さまざまの解答を私たちに示していることも興味深い。いずれにしても、地域とは固定的なもので変貌するものであり、与えられた時点における単元性を現わしているにすぎない。今日の単元地域はそれ以前の地域とは面積的にも内容的にも異なるものであり、また将来にもそこにちがった地域が形成されるであろう。このように過去の地理的事象をとりあつかいながら、単に過去にのみとどまらず、現在も明かにし、未来にまで発言する方法論が、静態的に現在の地理的事象をとりあつこう方法論よりも、動態的に地域の変貌をとらえようとするから、むしろ現在の意識やその関心が強いといふこともできよう。

紀要第二集は「地域の変貌」の外に会員諸兄の意図に従って紀要としての性格を強化している。それは辻田右左男氏と谷岡武雄氏によってアメリカとフランスの歴史地理学界の現状と動向を詳細に報告されていることである。紀要第一集の藤岡謙二郎氏、菊池一雅氏と水津一郎氏のイギリス、フランス、ドイツの歴史地理学界の近況・動向とともに世界の主要国の歴史地理学を明かにした貴重な論文である。また歴史地理学の基礎学、関連科学として、千葉徳爾

氏から民俗学を、鏡味完二氏から地名学の論文をよせていただいて、紀要第二集の内容を充実することができた。

紀要第二集の編集は一九五九年度総会にそのテーマを発表しから約一か年間、ようやくここに地域の変貌を刊行することができた。これも会員諸兄の御激励と御協力によるもので感謝に堪えない。編集委員会は会員諸兄の御期待に添うべく最大の努力を払った。しかしいまだ会員諸兄の御満足をいただく水準にまで達していないことをよく反省し、第三集に一層の向上が見られることを念願している。会員諸兄の一層の御指導をお願いする次第である。

一九六〇年四月五日

菊池利夫